

身体障がい者のエスカレーター利用にかかわる 問題とソーシャルアクション

齋藤 弘¹・小林 和樹¹・水瀬 光汰¹・森島 健¹・元田 良孝²

¹非会員 公益社団法人 東京都理学療法士協会（〒151-0053 渋谷区代々木2-26-5パロール代々木409）

E-mail: esca.ptoty@gmail.com

²正会員 岩手県立大学名誉教授（〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52）

E-mail: motoda@iwate-pu.ac.jp

病気や怪我は、場合によって身体的な後遺症を残すことがある。リハビリテーション医療は、その因子の克服に挑戦する。たとえ身体的な機能が元に戻らなくとも、その人が持っている残存能力を引き出し、環境に適合できるよう訓練する。

では、身体に障がいのある方が社会の環境や慣習に適応できない場合はどうするのか。当会は、その解決方法としてエスカレーターの片側空けや片側歩行レーンなどの現在の利用現状を社会課題化してソーシャルアクションを展開した。

その活動目的の一つに環境・慣習・システム等による物的・心理的弊害に着目し、それらを取り除くための課題解決策を検討していくことを掲げた。また、「エスカレーター、止まって乗りたい人がいる」をメインメッセージとして、他業種・他団体との連携を深めながら社会に発信していった。ここではその活動を紹介し、エスカレーターの片側空け問題を考えていただくきっかけとしたい。

Key Words : Escalator, Physical therapist, Diversity

1. はじめに

この活動の大きなきっかけになったのは、2015年の第34回東京都理学療法学会で講演を頂いた大日方邦子氏（当時、一般社団法人日本パラリンピアンズ協会副会長）のメッセージであった。講演の最後に『エスカレーターを歩いて乗る今の慣習を、そろそろ変えていきませんか？』と私ども会員と都民に向けて問題の提起をして頂いたのである。

また、以前より少なからず耳にしていた「右半身が不自由で右側を歩く人とぶつかり、舌打ちや罵声を浴びることもあった」「左手が不自由な為、エスカレーターは右側に乗り右手で手すりに掴まって乗りたい」「（片側を歩く人が多いため）エスカレーターに乗ること自体が怖い」といった私たちに関わる方々からの声に対して、公益法人としての価値や役割をもった東京都理学療法士協会だからこその発信を社会に届けることが今必要と判断し、リオオリンピックの視察を終えた2016年秋より活動を開始したのである。

2. 活動方法

活動初期には以下のコンセプトを掲げて取り組んでいった。

1. わたしたち（東京都理学療法士協会）は、障がいを持つ者を支援する専門職として、誰もが生活しやすい地域創造のために、エスカレーターの片側空けをなくそうと呼びかけるソーシャルアクションを東京2020まで展開し、『止まって乗るエスカレーター』を実現する為に活動する。

1. わたしたちは、本事業を地域住民や各団体と取り組むことで、ノーマライゼーション・バリアフリーを地域に醸成する為に活動する。

1. わたしたちは、本事業を地域住民や各団体と取り組むことで、多彩なネットワークを形成する為に活動する。

1. わたしたちは、本事業に留まることなく、社会の環境・慣習・システム等による理学療法士の対象者に関する物的・心理的弊害に着目し、それらを取り除くための課題解決策を検討していく。

表-1 主な活動実績

実施時期	内容	備考
2017年6月	第36回東京都理学療法学会 併催イベント	街頭アンケート
2018年6月	講演会「すべての人が暮らしやすい未来をつくる」 企画 都内小中学学生による「止まって乗るエスカレーター」標語大賞	
2018年11月	イベント「チャレンジ！東京for2020 エスカレーター止まって乗りたい人がいる」	
2019年3月	ロコモチャレンジ！推進協議会「locomonovation」プレゼンテーション	https://locomo-joa.jp/locomonovation/
2019年6月	『エスカレーター、止まって乗りたい人がいる』PV配信	
2019年7月	シブヤスマイルProject プレゼンテーション	https://shibuyasmileproject.jp/
2019年7月	森ビル・東京都理学療法士協会・J-workout共催 「ヒルズ街育プロジェクト 安全・安心なエスカレーターの乗り方教室」	
2019年11月	みなとラグビーまつり2019 ブース出展	ミナトエスカレーターマナー (仮称) 検討開始
2020年9月	「エスカレーターの乗り方 with コロナ」緊急アンケート調査実施	

また、対外的な発信においてはメインメッセージである「エスカレーター、止まって乗りたい人がいる」を前面にだして、『気づき』を促す広報戦略を実行していった(図-1)。つまり、エスカレーター機器メーカー等が啓発している「歩くと転ぶ危険がある」といった『安全性』の観点のみならず、

片側が歩行レーンになっていることによって不自由さを感じている人がいる-そのことへの理解や配慮が広がることによって、『多様性』を受け入れて少数派でも尊重される街になることを期待した発信が必要であると考えたのである。

3. 活動結果

前述のメインメッセージは、多くのメディアやSNSによって話題を生み、一定の共感を得たと感じている。主な活動実績(2017年～2019年11月)は表-1のとおりである。

図-1 メインポスター



図-2 講演会・標語大賞(2018年6月)



図-3 ハンドレイル上の標語例



図-4 安全・安心なエスカレーター乗り方教室 (2019年7月)



図-5 止ま乗るエスカキーホルダー

上記活動のなかで生まれた啓発グッズのなかに「止ま乗るエスカキーホルダー」(図-5)があり、希望者には無料配布をしている。2020年9月現在で全都道府県の約8,000名の方々に郵送させていただき、多くの大変嬉しいお礼のお手紙を頂戴している。「キーホルダーを鞆につけることで、安心して右側に乗車しています。」などと、お役立ちできている様子が伺える。現在も協会HPにて、申し込みを継続している。

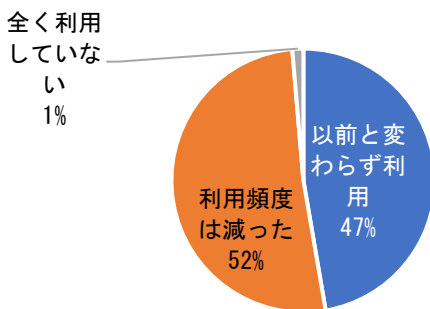


図-6 最近のエスカレーター利用 (N=74)

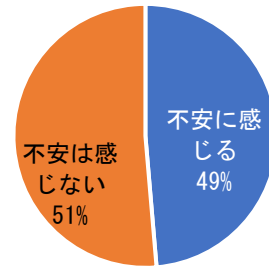


図-7 エスカレーター利用の不安 (N=74)

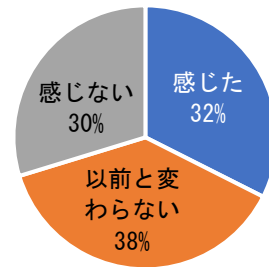


図-8 エスカレーター上の密の感じ方 (N=74)

また、コロナ禍で行ったweb上での緊急アンケートでは、エスカレーターの「密」に関する印象などについて、74名の方々(中間結果)に、ご回答いただいた(図-6, 7, 8)。

4. おわりに

当委員会の活動の成果は、他団体との連携なくしてなしえない。そもそも社会を動かす活動の一つの団体や企業のみで行うことは魅力的でない。

活動当初より、CSRに積極的な企業や団体、行政や学校法人、医療・介護・健康増進関連企業などとの連携しながら様々なアクションを実践していった。

奇しくも、私どもがマイルストーンに位置付けた東京2020は、新型コロナウイルス感染拡大により延期となった。「with コロナ」が影響を与える私ども価値観や文化などの変化は、未だ想定しきれない。ただ、「エスカレーター 止まって乗りたい人がいる」のニーズはなんら変わらないし、「多様性を尊重」する社会の空気感にこの課題を問いかけ続けたい。

この文章を作成している後のこととなるが、東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとしてこの活動がより大きな実を結ぶことを切に願っている。

(2020. 10. 2 受付)